

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520530

研究課題名(和文) 日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Tense, Modality, and Aspect in Japanese, English, and Other West-European Languages

研究代表者

和田 尚明 (WADA, Naoaki)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：40282264

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで和田が発展させてきた時制とその関連領域(助動詞・アスペクト・モダリティ・心的態度・証拠性)を包括的に扱える時制理論に、廣瀬が提唱する公的自己・私的自己ならびに公的表現・私的表現に関する理論(ならびに、その発展形である「言語使用の三層モデル」と和田が提唱する「C-牽引(話者意識への引き寄せ)」という概念を導入することで、より体系的かつ一般的な観点の裏付けをもった時制モデルとして発展させることを目指した。主に、この発展版の時制モデルを基に、日本語と英語・フランス語を中心とした西欧諸語が示す時制現象の相違点ならびに類似点を説明した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have tried to further develop a tense model from a more systematic and general perspective on the basis of Wada's tense theory, which can comprehensively treat tense and its related areas (such as auxiliaries, aspect, modality, mental attitudes, and evidentiality). The model adopts Hirose's theory of 'public/private self' and 'public/private expression' (and its developed version, the 'three-tier model of language use') and Wada's notion of 'C-gravitation', or 'gravitation toward the consciousness of the speaker'. Mainly within this framework, we have explained differences and similarities of temporal phenomena in Japanese and West-European languages including English and French.

研究分野：人文学

キーワード：時制 アスペクト モダリティ 比較研究

1. 研究開始当初の背景

近年、複数言語における時制現象の比較ならびに対照研究が盛んに行われているが、英語を中心に扱う際、日本人研究者は日本語との比較が、外国人研究者は母語との比較が中心となる傾向にある。また、文法化の観点からの複数言語における時制現象の比較も盛んで、完了形・進行形などの個別単位の時制・アスペクト形式の比較もかなりの数に上る。しかしながら、日本語と英語の時制現象を、助動詞・アスペクト・モダリティ・心的態度・証拠性といった関連領域も取り込んだ包括的な枠組みに基づいて対照研究しているものはあまりなく、ましてやドイツ語・オランダ語などのゲルマン語とフランス語などのロマンス語の時制ならびにその関連現象までを射程に収めようと提示された包括的時制モデルはほとんどなかった。さらに、全体的な傾向として、文法化の研究では、一般的な時制理論の観点から、言語間の相違点はあまり詳しく分析されてこなかった。

この流れの中、上述の問題を解決するためには、言語系統の異なる言語間でも当てはまる、時制とその関連領域をも射程に収めた包括的モデルであり、時制形式の示す類似点のみならず相違点をも共通の土台から詳細に分析でき、意味機能の変化にも対応できる時制モデルの構築が求められることになる。この目的を達成すべく、平成 19 年度～22 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）『日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究』（課題番号 19520414）を通して発展させてきた時制モデル（Wada 2001, 2009, 2010, 2011; 和田 2001, 2008, 2009, 2010a, 2010b, 2011）を、言語系統的に全く異なる日本語と西欧諸語を説明するための一般的言語理論の観点を導入することで、より体系的・一般的な観点を獲得できるように発展させ、かつ、同系統の言語である西欧言語間の相違点を際立たせられる概念を導入することで相違

点の分析をより詳細かつ体系的に行えるよう試みてきた。具体的には、時制構造的には A-形態素（人称・数・法と一体化した時制形態素）をもつ西欧諸語と R-形態素（人称・数・法と一体化していない時制形態素）しかもたない日本語は、廣瀬の一連の研究（Hirose 1995, 2000, 2002; 廣瀬 1997; 廣瀬・長谷川 2010 など）で提唱されてきた「公的自己・私的自己ならびに公的表現・私的表現」に関する理論においては、それぞれ、公的自己中心言語と私的自己中心言語の特徴を示すことが分かっており、当該時制モデルはこの理論ならびにそれを発展させた一般的言語理論である「言語使用の三層モデル」の観点から正当化できることが見込まれた。したがって、本研究では、この観点を取り込んだ形で発展させていく可能性が見込まれる。また、上述の課題を進める際、廣瀬のモデルを構成するキー概念である「公的自己中心言語」に分類される西欧諸語において見られる時制現象の相違点の説明には、公的自己中心性という概念と結びついた文法現象である「C-牽引（話者意識への引き寄せ）」という概念の重要性が示されており、その検証をより多くの言語現象で行う下地ができていた。このようにして、より一般的かつ体系的な観点から、（時制構造を基にした）詳細な時制の意味情報を図式化した時間構造に基づく各言語の時制現象の類似点と相違点の分析を行える環境、ならびに、意味機能の変化や時制・法・相の形式の発展がどのようにして起こるのかに関する分析を進めることができる環境が整うこととなった。

2. 研究の目的

本研究は、日本語と英語やフランス語を中心とする西欧諸語の時制ならびにその関連領域の類似点と相違点を観察し、その類似性・相違性を、より一般的な言語理論の支えを受けた包括的時制モデルの下、時制構造・時間構造に基づいた分析を行うことで、各言

語における各時制形式の時制解釈のメカニズムを解明することを目的とする。具体的には、以下の2点に焦点を当てる。

(1) 上述の廣瀬の言語モデル、特に、そのキー概念である「公的自己中心性・私的自己中心性」や公的自己中心性と関連する(和田の)「C-牽引」という概念を導入した時制モデルを、より一般的かつ体系的な観点から、より妥当性の高い包括的時制モデルへと発展させる(以下、発展型包括的時制モデル)。

(2) (1)の枠組みを基に、英語などのゲルマン語やフランス語などのロマンス語ならびにそれらと言語系統的に全く異なる日本語の、時制ならびにその関連領域に関する言語現象の対照研究をより広範に詳細に行う。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」で述べた2点を推し進める上で、以下の4つの単位を中心に進めた。

(1) 発展型包括的時制モデルの拡充とその枠組みに基づく時間構造による時制現象の対照研究(担当: 研究代表者・和田尚明)

(2) 渡辺が提唱する時制・相モデルに基づく、日本語とフランス語などのロマンス諸語の時制・モダリティ・アスペクトの研究ならびに発展型包括的時制モデルとの連携可能性の模索(担当: 研究分担者・渡邊淳也)

(3) 発展型包括的時制モデルの下で「C-牽引」を用いた、同系統の言語である西欧諸語間の時制ならびにその関連領域の相違点の分析(担当: 研究代表者・和田尚明)

(4) 日本語、フランス語、英語を中心とした非定形述語の時間に関する現象と主観性(発話態度・心的態度・証拠性)に関する比較分析(担当: 研究分担者・渡邊淳也)

実施方法としては、これらの単位で得られた知見を共有し、かつ、意見交換を行うために定期的に研究会(専門性が近い大学院生も参加)を開き、知見をより深めるために学外から専門家を招聘して講演会を開催した。

4. 研究成果

(1) 「3. 研究の方法」(1)の発展型包括的時制モデルの拡充に関して、同モデルの妥当性の検証を、個々の時制現象ならびにその関連領域に関する現象の分析を通して行った。このモデルは、次のような特徴をもつ。言語系統的に異なる日本語と英語を中心とした西欧諸語の時制現象も含めた言語現象の差異は、廣瀬の言語モデルのキー概念である「公的自己中心性・私的自己中心性」の違いによる部分が多くあり、それが時制構造の違いとして具現化している。すなわち、公的自己中心言語である西欧諸語はA-形態素をもち、私的自己中心言語の日本語はそれをもたない(R-形態素しかもたない)。A-形態素は、文法的な直示的中心を内包する時制形態素で、デフォルトの場合、認知的な直示的中心である「いま・ここ」を基軸として時制形式の選択が行われる。したがって、A-形態素をもつ言語は、聞き手志向性を前提とした話者の側面である公的自己を中心とした言語的特徴をもつ。聞き手に直示的中心の位置情報を明示化するということは、聞き手に配慮した言語現象と言える。一方、R-形態素は、文法的な直示的中心を内包しない時制形態素で、(認知的な)時間軸上のどの時点に時制形式の選択の中心が置かれるかは言語環境の特徴による。したがって、R-形態素しかもたない言語は、聞き手には時制解釈上の負担を強いることになり、自らの観点のみが関わる(思考・発話を含む)認知活動を行う際の話者の側面である私的自己を中心とした言語的特徴をもつ。この発展型包括的時制モデルに廣瀬の「言語使用の三層モデル」をリンクさせることで、発話行為や心的態度といった語用論の分野と時制・モダリティ現象をリンクした形で、より一般的な観点からより体系的に日英語の相違を説明できることが分かった。英語は状況把握と状況報告が一体となっている形がデフォルトなので、状況把握

に用いたモダリティや時制がそのままやすく語用論的な手段（ポライトネス等）に転用されうが、日本語は状況把握が独立した単位として成立する特徴をもっているので、（状況報告に関係する）語用論的な手段としてはそれ専用の印をつける傾向が強いということが分かった（「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]（以下、論文））。

(2) 「3. 研究の方法」(1)の発展型包括的時制モデルに基づく時間構造による時制現象の対照研究に関して、主に、(i) 日英語の時制体系の比較分析、(ii) 英仏語の未来表現の比較分析、(iii) 英語の個別時制形式の意味機能と解釈のメカニズムの分析を行った。(i)については、日英語の定形述語の時制構造の違い（A-形態素の有無）が時間構造の構築の際の相違となって現れ、時制解釈の際に受ける種々の要因と相まって、一見すると同じに見える現象（主節における時制形式の選択）から異なる現象（副詞節や間接話法補部の時制現象）まで引き起こしていることが改めて確認された（「5. 主な発表論文等」[学会発表]（以下、発表））。(ii)については、定形動詞が同じ A-形態素をもつ英仏語ではあるが、未来時制屈折辞という A-形態素の有無や、GO に基づく未来表現でも進行相の有無や‘to’の有無によって、各未来表現の時間構造は異なり、その結果、両言語の未来表現の時制現象の差異となって具現することを突き止めた（論文・発表）。(iii)については、時制解釈レベルで構築される時間構造がどのような要因によってどのように形作られるのか、それによってどのような解釈値が生じるのかのメカニズムが詳しく示された（論文・発表）。

(3) 「3. 研究の方法」(2)に関しては、フランス語の時制とモダリティを中心にアスペクトや証拠性ともリンクした枠組みが提示された。一部、日本語のアスペクトやモダリティ現象との比較もされており、通言語的

に時制ならびにその関連現象の類似点と相違点を分析するのに有効な枠組みであることが個々の現象の分析を通じて明らかになっている（「5. 主な発表論文等」[図書]（以下、図書）・論文・発表）。

また、発展型包括的時制モデルの時制解釈レベルにおいて、時間値計算の際に関与すると思われる概念（例：分岐的時間と直線的时间、叙想的時制と叙想的アスペクト）が多く採用されており、両モデルには相関性があることが明らかとなっている。実際、英仏語の未来表現を分析する際に、それらの概念を取り込んだ形での分析が試みられている（論文）。

(4) 「3. 研究の方法」(3)に関しては、同じ公的自己中心言語に分類される英語・フランス語・ドイツ語・オランダ語などの西欧諸語において時制ならびにその関連領域における現象に差異が生じるのは、多くの場合に「C-牽引」という概念の度合いに差があることが原因であるとする説明が有効であることが、個々の時制・法・相現象の検証を通じて、改めて確認された。C-牽引とは「話者意識への引き寄せ」であり、公的自己を中心とした言語において、公的自己の意識が当該言語の文法体系において重要視され、その際立った意識へ「引き寄せられる」さまが文法現象として具現化することを言う。この概念が、原則として、公的自己中心言語間において働くのは、当該話者の意識の重要視といった考えは聞き手との関係において初めて成立するため、自らの認知活動のみの世界では必然性のない概念だからである。公的自己の意識は、定義上、時間軸上では発話時に置かれるので、C-牽引の度合いが高い言語ほど、時制現象・時間関連現象に関しては発話時を中心とした「現在の磁場」に引き寄せられる文法現象を多くもつと言える。C-牽引度は、英語が一番高く、ドイツ語が一番低く、フランス語とオランダ語はその中間にくる。本研

究において、この C-牽引は、一部の文法化の過程のきっかけならびに推進役を担う可能性があることが分かってきた（発表 ）。

(5) 「3. 研究の方法」(4)に関しては、非定形動詞を核とする「フランス語の主語不一致のジェロンディフ」という構文を中心に取あげて、発展型包括的時制モデルでも採用しているデフォルト解釈や言語環境により有標の解釈を導きだすメカニズムを、詳細なコーパスに基づいて解明した（論文 ・発表 ）。また、対応する英語の懸垂分詞構文のほうが発話状況に結びつきやすい傾向にあることも併せて報告されており、これは両言語の C-牽引の度合いの差に還元できる可能性を示している（論文 ）。

(6) 研究成果の一部を、和田・渡邊共編の論文集『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』（TAME 研究会、2015 年刊行）（図書 ）や渡邊の単著『フランス語の時制とモダリティ』（早美出版社、2014 年刊行）（図書 ）という形で出版することで、社会に還元できたことも有意義であった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 20 件)

和田尚明「英語の単純現在形の包括的分析」『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』1-45. 2015. 査読有

和田尚明「Be Going To と Aller 未来形：英仏対照研究」『文藝言語研究：言語篇』68, 121-182. 2015. 査読有

早瀬尚子・渡邊淳也「英語の懸垂分詞とフランス語の主語不一致ジェロンディフの対照研究」『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』97-179. 2015. 査読有

渡邊淳也「主語不一致ジェロンディフと認知モード」『フランス語フランス文学研究』107, 155-169. 2015. 査読有

Watanabe, Jun-ya “Gerondif ‘non-

coreferentiel’,” *Voix plurielles* 12-1, 207-224. 2015. 査読有

和田尚明「英語の単純現在形の分析再び」『言語研究の視座』292-308. 2014. 査読無

和田尚明「英語の 3 人称小説における過去時制形式の解釈メカニズム」『認知言語学論考』12, 291-335. 2014. 査読無

渡邊淳也「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」『フランス語学の最前線』2, 177-213. 2014. 査読有

渡邊淳也「前未来形のモーダルな用法について」『文藝言語研究：言語篇』66, 35-56. 2014. 査読有

Wada, Naoaki “On the So-called Future-Progressive Construction,” *English Language and Linguistics* 17-3, 391-414. 2013. 査読有

Wada, Naoaki “A Unified Analysis of Tense and Modality and the Three-Tier Model of Language Use,” *Tsukuba English Studies* 32, 29-70. 2013. 査読有

和田尚明「英語とフランス語の未来表現」『文藝言語研究：言語篇』63, 107-146. 2013. 査読有

渡邊淳也「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究：言語篇』63, 69-106. 2013. 査読有

〔学会発表〕(計 19 件)

Watanabe, Jun-ya “Gerondif non-coreferentiel,” 日本フランス語学会研究促進プログラム「パロールの言語学」大阪大会ワークショップ *Etude du francais basee sur l'observation des usages reels* (招待講演), 2016.1.30. 大阪大学中之島センター（大阪府・大阪市）

Wada, Naoaki “Differences in the Semantic Range of the English, Dutch, and German Perfects and C-Gravitation,” The 13th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC 13), 2015.7.24. ノーサン

ブリア大学 (ニューカッスル・イギリス)

渡邊淳也「主語不一致ジェロンディフと認知モード」日本フランス語フランス文学会秋季大会、2014.10.25. 広島大学 (広島県・広島市)

Wada, Naoaki “The English Simple Present Form and Its Interpretation: A Revisit,” Colloquium on the Relation between Grammar and Pragmatics II, 2014.7.10. 筑波大学 (茨城県・つくば市)

Wada, Naoaki “A Temporal Structure-Based Analysis of the ‘Be To’-Construction,” The 11th International Conference on Actionality, Tense, Aspect, Modality/Evidentiality (Chronos 11), 2014.6.17. ピサ高等師範学校 (ピサ・イタリア)

渡邊淳也「単純未来形と迂言的未来形」日本フランス語学会第 292 回例会、2014.5.10. 早稲田大学戸山キャンパス (東京都・新宿区)

Watanabe, Jun-ya “Gerondif non-coreferentiel,” La transgression: de l’émancipation à la progression, 2013.10.1. 西部カトリック大学 (アンジェ・フランス)

Wada, Naoaki “A Comparative Analysis of Some Differences in the Use of the ‘Future’ Tense in English and French,” The 5th Association Francaise de Linguistique Cognitive (AFLiCo 5), 2013.5.16. リール第 3 大学 (リール・フランス)

渡邊淳也「フランス語の「間一髪の前過去」と西日本諸方言における「未実現の「よった」」の対照研究」岡山大学文学部人文学フロンティア 2012 シンポジウム「ことばと外界認知 日本語 (方言)・英語・フランス語の構文からみえてくるもの」(招待講演) 2013.3.18. 岡山大学 (岡山県・岡山市)

Wada, Naoaki “A C-Gravitation Analysis of the Semantic-Range Shift of Perfects and Beyond: A Contrastive Study of English, Dutch and German,” Typology

Seminar in Tense and Aspect at Universiteit Antwerpen (招待講演), 2012.10.30. アントワープ大学 (アントワープ・ベルギー)

Wada, Naoaki “Towards a Systematic Analysis of English and Japanese Tense Phenomena,” Seminaire de Linguistique 2012-2013 (Science, Texts, Languages) of France’s National Scientific Council (招待講演), 2012.10.26. リール第 3 大学 (リール・フランス)

Wada, Naoaki “A Critical Evaluation of Declerck’s Tense System and Its Comparison with Wada’s Tense System,” Advanced Linguistics Course of Graduate School at Universite Lille 3 (招待講演), 2012.10.25. リール第 3 大学 (リール・フランス)

和田尚明「公的自己・私的自己と間接話法補部の時制現象：対照言語学的分析」第 3 回引用・話法の会、2012.8.31. 筑波大学 (茨城県・つくば市)

渡邊淳也「叙想的時制と叙想的アスペクト」日本フランス語学会第 278 回例会、2012.5.12. 跡見学園女子大学 (東京都・文京区)

〔図書〕(計 2 件)

和田尚明・渡邊淳也 (編)『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』TAME 研究会、2015、213 頁

渡邊淳也『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社、2014、170 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田 尚明 (WADA, Naoaki)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：40282264

(2) 研究分担者

渡邊 淳也 (WATANABE, Jun-ya)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：20349210